

災害時に活躍する 薬剤師



前編 物資よりも心構えが大事

東日本大震災や令和6年能登半島地震に続く豪雨など、いつ災害に見舞われてもおかしくないと言えるほど、昨今はさまざまな災害が起きている。災害支援薬剤師として被災地に赴くこともある薬剤師はどんな活動が求められ、どのように関わればいいのか。災害支援薬剤師を経験した会員に話を伺った。(総務室・広報委員会)



現地に行くだけが 支援ではない

大阪南・ななほし薬局土生店
山原 大輝先生



独立と同時に協励会員に

薬業とは関係のない家庭に生まれた山原大輝先生が薬剤師を目指したのは、単純に薬剤師という職業に興味があったからだという。「学生時代生物が得意でバイオ医療に興味がありました。薬学部なら関われると思ったのですが、入ってみたらイメージしていたものと違いました」と笑うが、大学を卒業後にチェーン系の薬局に就職して3年半ほど勤務し、さらに個人で数店舗展開する薬局に転職したのは「いつか開業するための修業になる」と思ったからだ。

当時から入会していた(一社)大阪府薬剤師会で協励会の会員と知り合い、「熱心に声をかけてもらったので、2019年(令和元年)に独立する

のと同時に入会しました」という。店名の“ななほし”はテントウムシのこと。テントウムシは常に太陽に向かって飛んでいく習性があることから、自身の飛躍をテントウムシに重ね合わせたのだ。

震災から9日後に 現地赴任

山原先生が災害時派遣で被災地に行くことになったのは、大阪府薬剤師会の災害対策担当だったからで、これまで被災地支援などの経験はなかったものの、災害支援薬剤師の派遣の話を聞いた際に、「災害対策担当として自分が率先して行くべきだ」と感じたという。大阪府薬剤師会は、令和6年能登半島地震が起きた

直後の2024年(令和6年)1月3日(水)に災害対策本部を立ち上げ、すぐさま災害支援薬剤師の派遣を調整した。

同年1月9日(火)に山原先生を含む2名の薬剤師で大阪府を出発。石川県金沢市に到着し、翌日10日(水)にレンタカーを借りて輪島市を目指した。しかし通常であれば車で2時間程度で到着する輪島市まで片道6時間もかかってしまう。輪島市に向かう主要道路が1本しかなく大渋滞で、現場の混乱ぶりを実感することになった。なお山原先生は同年1月12日(金)に任務をひとまず終え、引き続き1月17日(水)～19日(金)、1月31日(水)～2月4日(日)にも現地を訪れた。その後、大阪府薬剤師会からは2月後半にかけて延べ42名が派遣された。



店名の「ななほし」のキャラクター



調剤が基本の店内



大阪府薬剤師会のモバイルファーマシー



薬剤師の職能が活かされる

山原先生の派遣期間中、厚生労働省からOTC医薬品の送り込みはあったものの「必要な量がそろっていた」とは言い難く、当初は医薬品の調達に混乱がありました。また全国にモバイルファーマシーは22台ありますが、そのうち17台が現地に出動して救護所に展開していました」と状況を説明する。特に今回の被災地は、もともと薬局など医療機関が少ないエリアということもあり、モバイルファーマシーは大いに活躍したようだ。被災地では、基本的にJMAT(日本医師会災害医療チーム)が応急の救護所を立ち上げる。その救護所にモバイルファーマシーが行き、JMATから受ける処方箋に対して災害支援薬剤師が調剤対応を行う。「薬剤師ならどなたでも活動することができますが、学校薬剤師の経験がある方は、より活躍できると思います。避難所に行くと換気や衛生面など避難所の環境管理が大事だからです」と述べる。

令和6年能登半島地震は1月に起きたので避難所は寒く、ストーブをたいていた。換気を怠ると避難所内に二酸化炭素がたまる。「頭痛や吐き



1階部分が潰れた家屋

気が起きるほど二酸化炭素濃度が上がっている避難所もあると聞きました。換気の重要性を説明できるのも薬剤師の職能の一つです」と山原先生。平成28年熊本地震の際にはノロウイルスが発生し、薬剤師が消毒の指導にあたったと聞かされた。今回は看護師さんなどが消毒を徹底していました。しかし、ノロウイルスやインフルエンザ、新型コロナウイルスの発生を完全に抑えることはできませんでした」と話した。

重要なのは心構え

有事を想定し薬剤師が準備できることは、「OTC医薬品や衛生用品など物資の調達も大事ですが、災害時には『自分に対応するんだ』という心



陥没した穴に落ちた車

構えが大事」だと山原先生は考えている。「私が現地に行けるのも従業員さんがしっかり店を守ってくれるからです。店を守ることも、災害支援になると何度も伝えました。薬剤師を現地に派遣するために、何ができるのかを考える機会をもっておくといいと思います」と山原先生は言う。

また災害支援薬剤師の経験がない薬剤師に向けては、「被災地に入るのには勇気があることかもしれませんが、薬剤師の職能や業務の観点からすると、被災地の最前線に行くことはありません。私たちは地域の皆さんが落ち着く場所を守る立場であることが多いです。少しでも多くの方に協力いただけたら」と結んだ。

(聞き手:広報委員 山岸翔太)



地域と顔が見える 関係性を大切に

愛媛・ダテ薬局
井上 貴博先生



地域の健康を支える

「伊達は十万石、鶴島城址」と宇和島小唄に歌われるように、伊達十万石の城下町として栄えた愛媛県宇和島市を中心に、薬局だけでなく介護施設の運営も手掛ける井上貴博先生。井上先生の祖父にあたる忠先生が、JR宇和島駅に近い恵美須町商店

街の一角で天寿堂薬局を開き、2代目にあたる父・一壽先生のときに協励会に入会。井上先生は薬科大学を卒業後に、東京西・(株)龍生堂本店などで修業を積み、1990年(平成2年)に戻ってきた。その際に閉店予定だった薬局を引き継ぎ、ダテ薬局を開局するに至った。順調に店舗を増やしていくなかで、(一社)愛媛県薬剤

師会がケアマネージャーの資格取得を推進しており、地域密着型の薬局として必要になるかもしれないと取得。2015年(平成27年)に介護事業を始める。地域に足りないサービスを模索しながらデイサービスやグループホームを次々と増やし、いまやアポトライグループとして約150名の従業員を抱える大所帯をまとめている。



多機能薬局ならではの店内



輪島市にある協励薬局の門前薬局



派遣された仲間と

自店も被害を受け、 高まる危機感

井上先生が災害支援薬剤師の活動に関心をもったのは、1995年(平成7年)の阪神・淡路大震災だ。当時所属していた青年会議所で被災地支援に出向くことになり、参加したかったが都合が合わず見送った。後日談を聞いて薬剤師として現場を知るために行くべきだったと後悔が残った井上先生は、2011年(平成23年)の東日本大震災の際には率先して手を挙げた。新店舗の開局が2011年(平成23年)4月1日(金)に控えており、愛媛県薬剤師会の派遣第2弾で現地入りした。

その井上先生は平成30年7月豪雨(西日本豪雨)の際には、店舗の一つが被害を受け床面が浸水する事態となった。愛媛県はいつ地震が起きてもおかしくないといわれ続けている南海トラフに位置している。自分の薬局が崩壊の危機にさらされる可能性も高いと感じた井上先生は、令和6年能登半島地震が起きた際に、有事の対応を経験しておきたいと災害

支援薬剤師に名乗り出た。

避難所から見えること

2024年(令和6年)1月22日(月)の早朝5時に愛媛県薬剤師会館に集合。5日間の被災地支援のため、井上先生を含め3名で能登半島を目指した。(公社)石川県薬剤師会の事務所にて情報共有を行い、輪島市(門前、輪島)、穴水町(穴水)、能登町(宇土津)の避難所に行くよう指示を受けた。宿泊拠点となった羽咋市柴垣町から各避難所に移動しながら支援を行ったが、「避難所の場所がバラバラで移動にかなり時間がかかった」と当時の状況を説明する。門前、輪島の避難所に出向いたが、柴垣町を何時に出発するかで到着時間が大きく変わった。「門前へは朝6時に出たら2時間で着きますが、9時に出たら7時間かかりました。渋滞がひどくてたいへんでした」と振り返る。何とか避難所に到着しても、「例えば門前では避難している方たちは昼間の明るい時間は自宅に帰り家の片付けをして、避難所に戻ってくるのは停電で自宅が暗くなる夕方以降。仕方ないので避難所に備蓄されているOTC医薬品の確認を行いながら、避

難所を回りました」と井上先生。

被災地を移動していると、ガレージのなかで過ごしている方を見ることがあった。「知らない方の多い避難所では落ち着かないからでしょう。ただガレージのシャッターを下ろしてストーブをたけば、換気がされないため二酸化炭素中毒になる危険性があります。話を聞くと頭痛を訴える方がいたので、二酸化炭素チェッカーがあるといいですね」と指摘した。

連携が取れる関係づくりを

井上先生は、「日本全国どこでも起きるのが災害です。他人事と思わずに自分のお店でも十分に備えておくべきです。ダテ薬局がある宇和島市では、市内にある18薬局に災害備蓄医薬品が置かれています。宇和島市と交渉して予算をつけてもらいました」という。災害支援薬剤師の活動をテーマに講演を行う機会のある井上先生は、モバイルファーマシーの重要性についても訴求。結果として愛媛県が補助金を出してくれ、愛媛県薬剤師会でもモバイルファーマシーを保有することができた。

そんな井上先生は、行政、医師会、住民などと「顔の見える関係づくりをしておくことが有事の際の連携につながります。人同士の連携が何よりも大切です」と力説する。関係者でSNSのグループをつくり、情報交換も欠かさない。被災地支援を経験したからこそ、地元での体制づくりに日々取り組むことができる。すべては薬剤師としての有事への備えにつながるのだ。



派遣箇所を表す地図



現地での打ち合わせ